

# カルシユの足跡を追って

◇6◇

若松 秀俊

前回までに述べた家屋 四年間生活した。

で、彼らの生活が始まった。大正十四(一九二五)年の秋のことである。それから一カ月ぐらい経って暮らしが落ち着いてくると、周囲のことが少しづつ分かってきた。

## 家庭生活

(上)

フリッツは故国と全く霧囲気を異にする人家や景色に興味を覚えて、動きたした。日曜日には必ず散歩にでかけた。奥谷の官舎の近くは静かなところだ。ここに来ると不思議なくらい不安が消える。気持ちが悪く着くのだ。どうやら、心の静けさを感じさせる何かがあったようだ。官舎には十

和四十三年のNHKインタビューでメヒテルトの直前で自ら語っている。フリッツがメヒテルトをあえて日本の学校に行かせるなかつたのは、ドイツである。そのころの二人にとって、和風の家具・

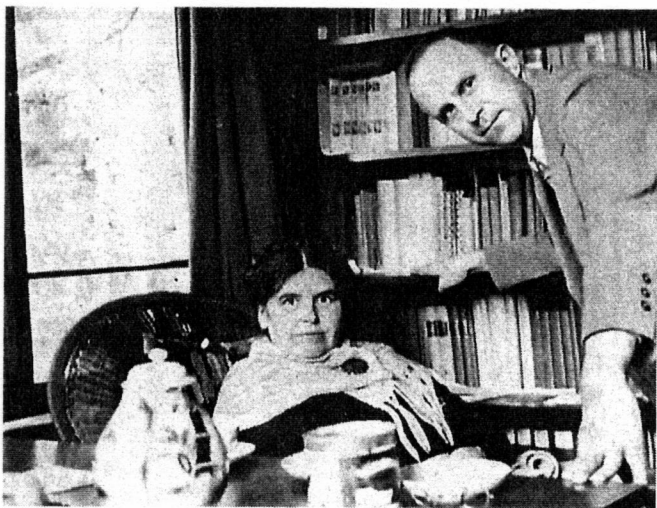
五年ごろに撮ったもの。手鏡、掛物、人形、仏像、置物、陶器などを手に入れたという。

松江は古い土地柄である。江戸時代の手鏡はエラメラが大事にしていた。箱に入った人形だ。

普段、エンメラは庭のお気に入りであった。急須や仏像は母の着物など。家の天床はいつもネ

ズミの運動会であった。その対策として猫を飼っていた。犬も飼っていたが、最初は黒いポチ、その後は斑点のあるフレックキーだった。

# 父娘のきざずなと心の交流



フリッツと風邪療養中の妻エンメラ

と一緒に、現在次女のフリーデルンが保管している。松江の気候はエンメラには合わず、病気がちであった。また彼女は、きちんと物事を処理しなければ気が済まない人であったようだ。お手伝いもその点は大変だったようだ。

メヒテルトはそんな母に、感覚的に違和感を感じていたという。その分、フリッツは孤独だったのだから、気持ちがメヒテルトに強く傾いていった。一方、エンメラは、最初は宗教上の理由から彼を警戒していたが、後にはうち解けたという。とにかく、家族以外でたった一人のドイツ語での話し相手であった。

(東京医科歯科大学 学院教授)

|| 文中敬称略 ||